

堂巡りと神憑け

— 美作のヤセゴセについて —

豊島修

—

わが国の民俗宗教には信仰対象とする聖物や聖地を巡り、神仏の恩寵や加護を祈るための苦行をおこなう宗教形態がある。たとえば、巡礼や遍路はまさしくその代表的な宗教形態の一つであろう。西国三十三所観音巡礼や四国八十八カ所札所を巡る遍路は歴史が古く、またその規模も大きく、霊場を巡る行程もながい。これは西国巡礼や四国遍路が信仰対象とする観世音菩薩や弘法大師、あるいは霊場への信仰を苦行と「実践によって表明する宗教現象であった」^②からにはほかならないといわれる。さらに、こうした大規模な聖地・霊場を巡る巡礼や遍路のほか、プリミティブな形の

巡礼として、素朴な信仰対象である祠や堂などの周囲を巡り、神仏の加護を祈る信仰習俗もある。現今の「お百度踏み」^③「千度詣り」はその顕著な例で、いずれも拝殿あるいは本堂と百度石との間を往復するのが一般的習俗である。しかし、これも古くは拝殿や本堂を巡る信仰があったものと考えられる。

このような宗教形態は一般に「行道」と規定され、巡り行道は修験道にも取り入れられていることが五来重博士によって指摘されている。^④すなわち修験道の入峰修行において、山伏修験は大峯山上の七十五なびき麻や葛城二十八宿^⑤などの行場行場を歩いたり、平等岩（行道石）などの行場を巡るが、これが行道（禪定）であり、しかもこのような行場を巡るこ

とが西国巡礼や四国遍路の巡礼のプリミティブな形であったと想定されている。^⑥

ところで美作地方(現・岡山県)は古くから修験道の発達した地域であり、現在も中世的な山岳寺院が多く存在する。英田郡美作町上相字畝の真言宗高福寺(現・安養寺)もその一つであるが、嘗て高福寺の灌仏会くわんぶつゑのとき、参詣人の中からヤセゴセという小像を背負って堂を巡り、願をかける信仰行事があった。これは巡り行道の古い形である堂巡りの信仰行事と考えられるが、従来、高福寺のヤセゴセ行事については松浦円明氏の報告があるのみで、その後の調査研究を聞かない。筆者は氏の報告を基にして現地調査し、さらに美作の真庭郡から新たな事例を若干得たので、以下のヤセゴセ行事をとりあげ、その行事内容や信仰について検討してみたい。それはとりもなおさず、修験道のシャーマニズム儀礼の研究に寄与するところがあるかと思う。

二

さて、高福寺のヤセゴセ行事というのは、同寺の灌仏会くわんぶつゑのときに、参詣人の中からヤセゴセという小木像を背負って出て、参詣人と

おかしいか ヤセゴセ

おかしゆうも候はず

と対話し、これで笑わぬ者は福を授かるという伝承である。^⑧これは『東作誌』^⑨(一)を引用した間山薬師はしたやまの話であるが、『東作誌』の「薬師堂」の項に記載する全文は次の通りである。

四月八日の誕生会にヤセゴセと云ふ事あり、(岡山県筆者註)当山参詣の貧賤なるもの瘦ゴセの像を背負て薬師の廻りを裸形になりて三度巡る、其時参詣の人々是を見て手を叩き、可笑カヤセゴセと云ふて大に笑ふ時に、彼者ヲカシウモ候ワズト云ふて些も笑わぬ者も福を授り、富有の身となると伝へ、今に毎年此事あり

また明和七年の『美作一覽記』^⑩「勝南郡上相村間山之事」の項にも、間山薬師堂のヤセゴセ行事の記述がある。すなわち

(上略)此之地内ニ薬師堂あり、弘法大師之自作なり(と説之)し伝ふ薬師如来安産之木像あり、世人何ニ故かヤセゴセと唱ふ、(中略)毎年四月八日ニ参詣之者之内祈念せし者、男女となく裸体となり、此之ヤセゴセを背負ひ或ハ抱き、裸躰之男女多人数銘々手を懸け、土地之方言ねるといふこと致す、参詣之多衆、男女裸躰ニ而狂するが如き風姿を見て思わず笑ふ、裸体之祈念者ヤセ

ゴセをねるねる、異口同音ニ、ねむたるがこぶじておかしうも候はん、候ハン、〜と唱へ、終日入替り立替りねり晩方ニ及ぶと、(後略)

とある。さらに同書は続けて、時にはこのヤセゴセの木像を谷間や樹間などへ投げ込んだが、そのヤセゴセの像は夜中の間にもとの薬師堂に還り、以前のように安座していたという靈驗譚を述べ、このヤセゴセの信仰行事が幕末の元治・慶応の頃まで盛んにおこなわれていたことを記している。

右の二書によって、江戸時代には(一)間山高福寺の薬師堂にヤセゴセの像があり、それは谷間や樹間に投げ込むほど数多くあったこと。(二)毎年四月八日の間山薬師如来の誕生会に参詣する群集の中から、祈願のある者がヤセゴセ像(長三〇センチ位)を背負って薬師堂のまわりを三度巡ったり、裸体で「練ったり」したこと。(三)祈願者と参詣人の間で対話(問答であろう)がおこなわれたことなどが知られる。このうち(二)と(三)は、ヤセゴセの信仰行事を構成する中心的要素であったと考えられ、後述するように高福寺が天正年間まで、間山の山上にあった七堂伽藍の一つであったことと併せ注意されるのである。

以上、管見した記録文献から間山高福寺の薬師堂でおこなわれたヤセゴセ行事を述べたが、このほか同じ美作の北

西部に位置する真庭郡一帯にも、ヤソージの名称をもつ小木像とそれにまつわる信仰伝承が多くあり、嘗てこの地域でも間山薬師堂のヤセゴセと同様の信仰行事が広くおこなわれていたらしい。いま先学の報告^①によってその所在を示すと、まず同郡勝山町神庭かみだまの東福寺(真言宗)の本堂の中に「ヤソージ」という高さ六十センチ位の坐像が祀られ、ヤソージ像を背負って堂のまわりを三度笑わずに巡ると、想いこがれた人に添遂げられるという伝承がある。また同町江川の薬師堂にも同じヤソージの木像があり、神庭の東福寺と類似した伝承が残っている。さらに『久世町誌』によると、同郡久世町久世の釜見堂にもヤソージの小像があった。夏の夜若者がヤソージを背負って「やそじ、こそじ、おかしけりや笑へ」と囃しながら、境内を巡った伝承を載せているが、現在はその堂もなく、また木像も不明である。このほか同郡湯原町宮根の観音堂の脇立に二体の木像があり、それをヤソージと称し、子供がヤソージ像を後向きに背負って「ヤソージ、ヤソージ、おかしゆうもござらぬ」といしながら観音堂をまわり、笑わなければ良いことがあるという伝承がある。

ところで松浦円明氏の報告後、新たに真庭郡の三カ所からヤソージが発見された〔左表〕^⑥〔⑦〔⑧〕。一つは同郡勝山

町月田本字合ノ坪の沼本静家に十四体のヤソージが所蔵され、あとの二カ所は同郡落合町上河内の円融寺(天台宗)と同町鹿田字門前の小祠に、それぞれ三体および二体のヤソージ像が安置されている。そのうち前者は、もと五十十

名 称	所在場所	所 在 地	備 考
① ヤセゴセ	間山高僧寺 (業師堂)	英田郡美作町上相字畝	四月八日、 前夜業師堂 で籠る
② ヤソージ	東福寺	真庭郡勝山町神庭	
③ ヤソージ	業師堂	江川	
④ ヤソージ	釜見堂	真庭郡久世町久世	
⑤ ヤソージ	観音堂	真庭郡湯原町宮根	二体
⑥ ヤソージ	沼本静氏所蔵 (もと熊野神社の別宮寺)	真庭郡勝山町月田本字合ノ坪	十四体
⑦ ヤソージ	円融寺	真庭郡落合町上河内	三体
⑧ アマンジャク	小祠	鹿田字門前	二体

六十体程のヤソージ像が大師堂に安置されていたといわれ、^③ 間山薬師堂と同様多くのヤソージがあったことを知る。注意されるのは、十四体のヤソージ(高さ約五十センチ)のうち、五体の神像(うち女神像一体)、閻魔像・姥神像各一体、十王像の中の六体とみられる像などが判明することで、そのうち女神像や姥神像はほとんど磨滅している。伝承に

よれば、昔子供がヤソージの木像を背負って遊んだといわれ、子供の遊び相手にされて磨滅したのと考えられる。したがって子供の遊びに移行する以前は、間山薬師堂のヤセゴセと同様に願掛けの人がこのヤセゴセ像を背負って堂を巡れば、願いがかなうという信仰があったと思われる。

図版Web非公開

十王像と姥神像(沼本静氏所蔵)

他方、円融寺の三体のヤソージは、もと熊野神社の本地堂(本尊阿弥陀如来)に安置されていたが、明治初年の神仏分離の際に本地仏とともに円融寺が引取ったといわれる。^④ 同寺にあるヤソージは二体が小仏像で、残る一体は宝冠を着けた小神像である。古老の伝承によれば、ヤソージは石段を転がし、何度となくヤソージを背負って石段を登ったといわれ、ヤソージは転がすほど機嫌がよいとされていた。同町鹿田字門前の小祠に「アマンジャク様」という二体の

木像があり、この木像を背負って笑わないで堂を一周する子供の遊びがあったが、唱えごとは残っていない。^⑤

新たに発見されたヤソージとそれにつつまる伝承は以上であるが、このほか真庭郡一帯の社寺や個人の家にヤソージ像が所蔵されているものと推測され、今後の調査によっては、新たなヤソージ像が見い出される可能性がある。

三

これまで間山高福寺の薬師堂でおこなわれたヤセゴセ行事、および真庭郡一帯に分布するヤソージの所在とその伝承について述べてきたが、以上の事例からも知られるように、ヤセゴセまたはヤソージの信仰行事の内容に変化のあつとがみられる。一体にヤセゴセとかヤソージという名は何を示すのか、またこの信仰行事の本質は何であつたのか、以下この点について考察を加えてみたい。前節でふれたように、この信仰行事を構成する中心的要素の一つは、祈願者がヤセゴセ(ヤソージ)の小仏(神)像を背負って堂を巡る行道にあつたが、この堂巡りの行道は、本来、神を憑依させる神憑け(『神霊憑依儀礼』)の一方でなかつたかと考えられる。

周知のように、わが国には神憑りや託宣という宗教現象

があり、この神憑りによる託宣は、古来、一般庶民の精神生活や社会生活に大きな影響をあたえてきたことはよく知られている。この神憑りは多くの人々に可能であつたが、またこの儀礼を専門的におこなう呪術宗教者がいた。いわゆる巫現の徒がそれで、このなかには古代の山林修行者の系譜を引く山伏修験や、法師陰陽師、あるいは漂泊の巫女から転じた口寄せ巫女などがあげられるが、なかでもとくに神霊憑依・託宣の宗教儀礼を主におこなつてきたのは山伏修験である。いうまでもなく山伏修験は、霊山高岳を修行の場として、参籠や抖擻行などの生死を超える苦行修行をおこなつたが、これは山中で神霊——総じて山の神・山神といわれる——と交流したり、神霊と一体化することにより、「奇蹟、予言の超人間的験力」を獲得するところに本来的な意味があつたといわれている。^⑥

このような験力獲得のために苦行をおこなう山岳宗教者を、古代では優婆塞・禪師・持経者などと呼ばれたが、修験道の発達した平安中期から鎌倉時代には、吉野・大峯・熊野などの山岳大霊場や地方の大小の山岳霊場で入峰作法がととのえられ、多くの山伏修験によって入峰修行の実践がおこなわれた。たとえば『日本霊異記』(下巻第一話)に、紀伊国牟婁郡の熊野村の持経者であつた南菩薩永興の同行

山伏である禪師(持経者)が、熊野山中で「捨身」をおこなった話がある。また『古今著聞集』(卷二)には、西行が大峯山に結縁入峰し、「先達の命にしたがって身をくらし」める難行苦行を要求されたことがみえるのは、その顕著な例である。こうした厳しい苦行を实践した修行者に神霊が憑依し、神霊(祖霊||山の神)と一体化して神の言葉(託宣)を託宣したり、身につけた験力で憑依者に神霊を憑依させ、託宣をおこなわせる神霊憑依呪術による託宣儀礼をおこなうことができたのである。その背景に神は人に憑依し、人が神になるという人神信仰があることに注意せねばならない。

こうした山伏修験の神霊憑依呪術による託宣儀礼は、一般にシャーマニズムと称され、現在もその残存形態が木層御岳系行者の御座立てや、福島県下におけるハママ祭の憑依儀礼、湯殿山系行人による庄内地方の作神祭りの憑祈禱、美作地方の両山寺を中心とする護法飛び儀礼の護法憑けと護法飛びなどの祭儀にみられる。そのうち両山寺系統の護法飛び儀礼の護法憑けは、太鼓や山伏の法螺で護法(山の神の化身である天狗)を降臨させ、子供たちが憑依者である護法実のまわりをぐるぐる巡ることにより、護法を護法実(2)に憑ける憑依儀礼の形式をとっている。これを三河の花祭

りにおける高峯祭の「神楽歌」では「神の稚児を中に置き、めぐり／＼てせしおとす」とあり、神の稚児という霊媒に山伏が神霊を憑依させるため、山伏たちが稚児のまわりを巡って入神させたと考えられる。そうすると江戸時代に、間山高福寺の薬師堂でおこなわれた堂巡りの行道も、本来は、ヤセゴセの像を背負って堂巡りをする事により、神を憑依させる神憑け(神霊憑依儀礼)の一形式であり、この神憑けによって「神人一体」となることに宗教的意味があったと推測される。前掲『美作一覽記』に祈願者の「男女裸体ニ而狂するが如き風姿」とか、「裸体之祈念者ヤセゴセをねるねる」などと記しているのは、まさしく堂巡りによって神を憑依させる神憑けの様相を示すものであろう。また祈念者が裸体になるのは、穢れをはらう意で、純粹無垢の清浄な身体に神霊が憑依するという固有信仰のあらわれである。これは山伏修験が山中で水垢離をとり、滝行をして苦行することや、先述した護法飛び行事において、憑依者である護法実が毎日「昼二十一遍・夜二十一遍ノ水行」をおこなう、沐浴潔斎と別火精進が課せられていたことと同じである。

こうして間山薬師堂でおこなわれたヤセゴセの堂巡り行道は、神を憑依させる神憑けの一方式であり、この神憑け

によって神と一体化することに宗教的意味があったと思われる。ところでこの場合、祈念者(憑依者)が神人一体となる神の性格が問題となる。嘗てこのヤセゴセ行事に注目された柳田国男翁は『年中行事覚書』において、『東作誌』を引用し「瘦御前」を細男(せいのお)と関係づけられたが、これはヤセゴセのヤセがヤソ、すなわち八十歳ということから年をとったという意で、ゴセは「尼御前」の御前であろう。すなわちヤセゴセ(ヤソーシ)は年をとった女性(山の神)の意味と解される。これを傍証するのは、前述した沼本静氏蔵「表」⑥の十四体のヤソーシ像のうち、五体の神像の中に女神像及び姥神像があることである。また前掲「表」②の神庭の東福寺の前にある橋をヤソーシ像に因んで「ヤソジ橋」というが、この神庭(かみば)というのも、おそらくもとは「神姥」の意と解され、いずれも姥神の山の神を指すものと考えられる。さらに山の神と同視される山姥を表象する姥神(媼尊)を媼堂に祀っているのは、越中立山の芦峠中宮寺である。立山は白山とともに古来北陸の著名な山岳霊山で、平安時代以来死者の靈魂の行く山として知られ、中世初期には山岳霊場寺院としての寺観を整えていた。この芦峠中宮寺には閻魔堂と媼堂があり、媼堂に媼尊が祀られ、姥とも祖母ともあらわされ、本尊とされる三体の媼尊と六十六

カ国ゆかりの媼尊像(六十六尊)が安置されてきた。日和祐樹氏の研究によれば、そのうち教体の媼尊が閻魔堂に現存し、その一体には「永和元年十二月 日 式部阿闍梨」の墨書銘があり、少なくとも中世以来のものであったことが知られる。近世には「立山の地獄極楽の観念から奪衣婆として信仰されてきた」といわれ、文政三年の『御媼尊縁起』に「来世ニハ極楽浄土江引導往生スル事無疑者也」とみえて、同縁起が立山修験によって主に女性を対象とする勧進唱導に用いられたことを知るのである。

ひるがえって間山高福寺のヤセゴセに注目すると、四月八日の薬師如来の灌仏会に、上相地区の住民が前夜薬師堂に籠る習俗があり、また四月八日には山からツツジやフジの花を取って来てカドに立てるといふ^⑧。これは仏教でいう誕生会とは別に民間でおこなわれる花祭り行事を指すもので、農事の着手に際して、山へ詣でて秋の実りを神に祈願するとともに、山の花をもって先祖の山の神をまつり、先祖の加護のもとに成女式(成男式)をおこなう儀礼が灌仏会に結びついて花祭り行事となったものである。したがって間山高福寺の薬師如来の会式に、ヤセゴセ像を背負って堂巡り行事をおこなったのも、古くは山の神の祭りの日に山の神(祖霊)を憑依させ、山の神と一体化することにあつた

ものである、この山の神が姥神像であらわされたのであろう。これが近世には、願のある人が姥神像などのヤセゴセ像を背負って堂巡りをおこなうことに変化したのである。『東作誌』や『美作一覽記』によると、間山高福寺は天正年間初めまで間山(標高二五〇メートル)の山上にあった七堂伽藍の一院であった。しかも間山がこの地方の山岳霊場であったことは、山上に地藏・仏の山・鏡の尾山・九十九谷などとともに経塚の地名がある(『東作誌』二)ことから知られる。『東作誌』は「経塚の地名」の項に「経文を瓦に堀たる塚あり、今も邂逅其瓦を堀出す」と記しており、現に平安時代の瓦経が出土している。これは平安時代から中世にかけて、間山を修行場とする山岳修行者の参籠行として、法華経を写経する「如法経一修行が浄行されていたことを物語るものである。おそらく山火事で全山が焼失する天正年間頃までは、山上の七堂伽藍の一つであった高福寺の山伏によって、堂巡りの行道が神霊憑依儀礼としておこなわれていたものと推測される。これが近世には四月八日の灌仏会と習合して、薬師堂の行事になったと解されるのである。

四

ところで、いま一つこの堂巡り行道の信仰行事を構成す

る中心的要素は、神憑った祈願者と参詣者との間で対話がおこなわれたことである。すなわち参詣者が「おかしいかヤセゴセ」というと、祈願者が「おかしゆうも候はず」と答える内容であるが、これは巫術シャーマニズム儀礼の問答形式であり、巡るにより神人一体となった憑依者と参詣者による託宣の問答であったと思われる。

すでに述べたように、わが国の巫術には神霊憑依による「託宣儀礼が多いが、とくに修験道の巫術は多く複式の託宣形式であるといわれる。すなわち神霊の憑く憑依者(受憑者)と、神霊を憑ける能憑者に分かれるが、この受憑者といわれる巫者は、一般にヨリマン(戸童)、ノリワラ(憑童)、ヘイダイ(幣代)などと呼ばれ、きわめて嚴重な苦行と潔斎によって神霊が宿るにふさわしい身心を獲得した者である。先述した護法飛び儀礼の護法実がこれであるが、その他木曾御岳山行者の「御座立て」では、「中座」と呼ぶ行者がこのヨリマン・ヘイダイに相当する。これに対して受憑者である中座に神霊を憑依させ、神憑った中座と問答して託宣を告げるのが前座先達(前座とも呼ぶ)である。すなわち前座先達は神憑った中座を媒介として、神のうかがいを立て、またお告げを記録するという。江戸時代に間山薬師堂でおこなわれたヤセゴセの信仰行事は、この木層御岳行

者の御座立てにおける中座と前座の間答の形式をとっており、神憑った祈願者が中座で、まわりの参詣者が前座にあたるのである。ここに古代・中世的な巫術シャーマニズム儀礼の残存を見出すことができるといえよう。おそらくもとは、山の神(祖霊)と一体化した憑依者(受憑者)がその年の豊凶や風水害、あるいは病苦など村落共同体の問題について託宣したものと推測される。これが近世には、祈願のある者がヤセゴセ像を背負って堂を巡り、巡っている本人はもとより、見た者もその姿を笑わなければ願掛けした者に福が授かり、富有になるといふ信仰に変わったのである。

また、このような巡り行道によって神仏と一体化することにより、「うまれきよまり」の擬死再生儀礼がおこなわれることもあったらしい。越後長岡市上前島の高毘羅堂には、近世の遊行者である木喰行道が享和四年(八十五歳)に作ったという自刻像がある。木喰行道の自刻像は高さ七九・六センチの坐像であるが、その特長は目や鼻が磨滅して丸太のようになっていふことと、背割りになっていることである。そしてこれを後向きに背負えば、ちょうど頭が入って肩に乗せられるという。伝承によれば、子供が自刻像の空洞に体を入れて背負えば、健康になるまじないと伝えられており、先述した真庭郡湯原町宮根の観音堂「表」

⑤)にあるヤソージ像を、子供が後向きに背負って堂巡りしたことを想起させる。おそらく江戸時代には、多くの庶民が背割りになった自刻像を背負って、ヤセゴセのように金毘羅堂を一心不乱に巡る行道がおこなわれたのであろう。その結果神憑った者は自刻像と一体になり、それまでの罪業が消滅して、心身ともに清浄になる「生れ清まり」の擬死再生として、余生の安楽と幸福がえられるという信仰があったものと考えられる。さらに金毘羅堂の自刻像と同様、仏像の背部が背割りになっているのは、日向国分寺(現・宮崎県西都市三宅)にある五智如来像である。この五智如来像も木喰行道が寛政四年から六年にかけて作成したものと考えられているが、そのうち背割りになっているのは大日如来・釈迦如来・宝生如来の三体である。ここには巡る行道の伝承は聞かれないが、いずれも三メートルもある巨像であるところから、嘗てこの三体の空洞に入れば、大日如来や釈迦如来・宝生如来と一体化し、罪業が消滅して再生する「生れ清まり」の信仰があったと推測してよいであろう。このような「生れ清まり」の擬死再生儀礼は、すでに指摘されているように、生前に一度死んで罪穢をほろぼせば再生して健康になり、死後もまた地獄に堕ちないという信仰である。融通念仏の伝法や浄土宗の五重相伝、あるいは

浄土真宗のお剃刀などの仏教儀礼(逆修儀礼)も擬死再生儀礼で、これを受けることにより、新しい人格が誕生したとする。これは仏教からえたものではなく、「日本固有の庶民信仰が仏教と結合し」たものといわれている。こうした民俗宗教としての擬死再生は、先述した立山の芦舩中宮寺の閻魔堂と娼堂でおこなわれた「布橋大灌頂」と呼ばれる法要^④にもみることができ、この法要は秋の彼岸の中日に列装束の信者がまず閻魔堂に入り、次に白布が三列に敷かれた布橋をわたり娼堂に入る。これを「浄土入り」と称し、閻魔のなかで「十念」をうけて一度死んだのち、扉が開かれて再生する。これによってそれまで犯せる罪がすべて消滅し、心身ともに清浄になり、余生の安楽の往生が約束されたのである。この布橋大灌頂の擬死再生儀礼は、中世以来、立山修験の勧進の^⑤一方法として執りおこなわれてきたことが指摘されており、近世には浄土往生、とくに女人往生の方便として説かれたのである。

こうして「生れ清まり」の擬死再生儀礼は、多く室内の法要になっているが、本来は野外の「庭儀」という行道をともなう儀礼に数多くあったものであろう。そして何よりも重要なことは、巡ることにより神仏と一体化すれば、託宣もおこなうし、擬死再生の「生れ清まり」にもなるとい

うわが国固有の信仰があったことに注意せねばならない。この意味から間山薬師堂でおこなわれたヤセゴセの堂巡り行道は、もときわめて厳肅な宗教行事であったということができるのである。

五

以上、美作の間山高福寺の薬師堂でおこなわれたヤセゴセ行事について検討してきたが、この堂巡り行道の行事は、もと神霊を憑依させる神憑けの一方式であり、神憑けによって神霊と一体化した憑依者が託宣や「生れ清まり」の擬死再生をおこなう宗教行事であった。それは地方的霊場である間山を修行場とする山伏修験によって執りおこなわれた巫術シャーマニズム儀礼で、起源的には中世まで遡ることができ、しかし近世になると灌仏会と習合して薬師堂の行事となり、ヤセゴセ像を背負って堂を巡る願掛けの信仰に変ったが、庶民が託宣を信じなくなり忘れ去られると、この堂巡り行道の信仰行事は「かごめかごめ」や「中の中の小坊主」、または「地藏遊び」^⑥などと同様、子供の遊びに残ったのである。

しかしながら託宣をきくために行道して、神や霊を憑ける巫術は名称や行事こそ異なれ、嘗てはどこでもおこな

われていたと考えられる。したがって今後、他の類似例を記録文献や伝承資料でもって追求せねばならないが、この点については後日に俟つこととして、いまは堂巡り行道の信仰行事の一例を述べたにとどめたい。

註

- ① 新城常三氏『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』。速水侑氏『観音信仰』。近藤喜博氏『四国遍路』。その他多数。
- ② 五来重博士「巡る宗教」の辺路と巡礼」『まつり』三十三号、所収。
- ③ 大塚民俗学会編『日本民俗事典』。
- ④ 註②前掲書、同上「巡る宗教」(一)(二)『同朋』昭和五十六年九月、十月号)参照。
- ⑤ 五来重博士「山の宗教」修験道」第三章大峯の奥駈Ⅰ、第四章大峯の奥駈Ⅱ。「諸山縁起」(『寺社縁起』日本思想大系20)所収「転法輪山・宿の次第」。「河内高貴寺縁起」(『大日本仏教全書』一一七、所収)。
- ⑥ 註②、註④前掲書。
- ⑦ 「ヤソージとヤセゴセ」(『岡山民俗』39所収)。尚、筆者の現地調査では松浦円明氏にお世話になったことを銘記し、謝意を表す。
- ⑧ 『綜合日本民俗語彙』第四巻。
- ⑨ 『新訂作陽誌』五、所収。
- ⑩ 『岡山県史』第二十七巻「近世編纂物」(昭和五十六年三月刊)所収。
- ⑪ 註⑦。半田康夫氏「競技・童戯」(和歌森太郎編『美作の民俗』所収)。
- ⑫ このヤセゴセ・ヤソージの分布表は註⑩および昭和四十六年八月・四十九年十二月の現地調査と、三浦秀宥氏『岡山の民間信仰』(岡山文庫73、昭和五十二年二月刊)から筆者が整理し作成したものである。尚、五来重博士からも御教示を賜ったことを銘記し、厚くお礼申し上げる次第である。
- ⑬ 沼本静氏の教示による。
- ⑭ 円融寺住職長道円誠師の教示による。
- ⑮ 註⑫三浦秀宥氏前掲書。
- ⑯ 堀一郎氏『我が国民間信仰史の研究』(宗教史編。中山太郎氏『日本巫女史』。五来重博士「中世女性の宗教性と生活」(『日本女性史』第二卷中世、所収)。鈴木昭英氏「修験道と神がかり」(『まつり』十二号、所収)。その他。
- ⑰ 註⑤五来重博士前掲書。同上「修験道入門」。
- ⑱ 日本古典文学大系70。
- ⑲ 『新訂増補国史大系』九、所収。
- ⑳ これを修験道では即身成仏(即身成神)といい、この即身成仏の儀礼が「正灌頂」であったといわれている(註⑰参照)。
- ㉑ 註⑯鈴木昭英氏前掲書、同上「山岳信仰・修験道とシャーマニズムとの関係―護法飛びの考察をめぐる―」(『大谷史学』八号)。宮家準氏「修験道とシャーマニズム―護法を中心として」(桜井徳太郎編『シャーマニズムの世界』所収)。

C・ブラッカー氏『あずさ弓―日本におけるシャーマンの行為―』(岩波現代選書)。

②② 註⑤、註②。拙稿「美作の護法まつりと修験道」(五来重編『修験道の美術・芸能・文学』Ⅱ)山岳宗教史研究叢書15、所収)。

②③ 『早川孝太郎全集』Ⅰ。

②④ 註⑦前掲書。

②⑤ 両山寺文書『二上山鎮守護法祭式行事記』(明治三十六癸卯年七月改写)。註②前掲書。

②⑥ 『定本柳田國男集』第十三卷、所収。

②⑦ 『今昔物語集』卷第十四、第十七。『本朝法華驗記』卷下第一二四。

②⑧ 『伊呂波字類抄』タの項「立山大菩薩頭給本縁起」。

②⑨ 「立山信仰と勸進」(高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』山岳宗教史研究叢書10、所収)。

③⑩ 日和祐樹氏のネガによる。

③⑪ 註⑦前掲書。

③⑫ 五来重博士「仏教行事と花」(『花と日本文化』昭和四十六年十月刊)。

③⑬ 間山互経については石田茂作氏の調査報告があり(「互経の研究」頁三一八、『石田茂作著作集』第三卷所収)、その製作年代は伯耆大日寺の延久三年(一〇七一)に近い頃のものといわれるが、未だ確かな年号銘のある互経は発見されていないといわれている。尚、『東作誌』は美作の大梵刹寺院と

して東作に「間山、真木山菩提寺」、西作に「本山、豊楽寺、両山寺、円通寺、蕎麦尾山、宇南寺等也」と記し、いずれも中世以来の著名な山岳靈場寺院であった。『岡山県古文書集』(藤井駿・水野恭一郎共編)参照。

③⑭ 山岳修行者が法華経を書写し、誦誦することはすでに奈良時代からおこなわれ、『本朝法華驗記』には平安時代初期から中期までの持経者の伝記を集めている。佐々木孝正氏「本朝法華驗記にあらわれた持経者について」(『大谷史学』十一号)。その他立山、伯耆大山、山寺立石寺などで山伏が如法修修行をおこなった例証がある。五来重博士「庶民信仰における滅罪の論理」(『思想』昭和五十一年四月号)参照。

③⑮ 五来重博士「山伏の文化」二十二(『武道』昭和五十六年九月号)。

③⑯ 生駒勘七氏『御嶽の歴史』。同上「御嶽信仰の成立と御嶽講」(鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』山岳宗教史研究叢書9、所収)。

③⑰ 『円空・木喰展』(昭和四十七年十月六日〜十八日、朝日新聞社発行)。

③⑱ 五来重博士『微笑仏』、同上「修験道の諸相(Ⅱ)、行道(Ⅰ)」(『月刊アーガマ』昭和五十五年六月号)。

④① 根井浄氏「日向国分寺と木喰行道」(『尋源』第三十二号)。その他木喰行道の作品で背割りになっている像として、管見では山口県萩市の臨濟宗建仁寺派洞春寺蔵の釈迦如来像(一体)があり、後背銘に「寛政(九二)十二月四日ニコレヲカク」と

ある(昭和五十二年十月三日、筆者も参加した大谷大学国史学会秋・津和野方面研究旅行における現地調査)。

④② 註③④ 五来重博士前掲書。

④④ 註②⑨ 日和祐樹氏前掲書。五来重博士「布橋大灌頂と白山

行事」(高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』山岳宗教史研究叢書10、所収)。

④⑥ 註③

(本学講師 国史学)